

常に「目的」を意識し、生徒に必要な指導を主体的に考える習慣をつける

東京都 千代田区立麹町中学校

千代田区立麹町中学校では、実社会と連動させた取り組みを中心に、自律した生徒の育成を目指している。生徒の意欲を高める方法を科学的に研究するため、神経科学の知見を活用した校内研修を行うなど、新しいアイデアも多い。そうした多彩な教育活動を支える教員の指導力や発想力は、どのように培われているのだろうか。同校の教員育成の取り組みを見ていく。

取り組みの ポイント

- 1 その指導が何のためにあり、生徒がどう変容することを目指すのか、常に「目的」を意識し、その中での優先順位を考えるよう、管理職が教員への働きかけを続ける。
- 2 実社会と連動する教育活動を重視し、教員も生徒とともに学ぶ。



◎1947年に開校。校訓は「進取の気性」。外部と連携した指導改善を推進。生徒が大学生の指導を受けながら、発展的な学習に取り組む「麹中塾」などの課外活動も行う。

校長 工藤勇一先生
 生徒数 392人
 学級数 13学級（うち特別支援学級1）
 電話 03-3263-4321
 URL <https://www.fureai-cloud.jp/kojimachi-j>



校長
工藤 勇一
くどう・ゆういち

目黒区教育委員会指導主事、新宿区教育委員会教育指導課課長などを経て、2014年度から現職。

最先端の研修

生徒の意欲向上をテーマに、神経科学の観点から研修

東京都千代田区立麹町中学校は、国会議事堂や首相官邸などに近い東京都の中心部に位置する学校だ。教員の指導力を、未来を生きる生徒の育成と不可分な関係にあるものと位置づけ、その向上に力を入れている。

2018年度には、神経科学の研究者をファシリテーターとして招く校内研修を始めた。テーマは、「生徒のモチベーションを高めるための指導や環境のあり方」だ。第1回では、どのような場面で、教員が生徒にどのように声をかけたかを振り返って

発表した。そして、研究者が、その言葉は生徒の脳の活動にどのように影響するのかを分析し、課題があれば、理由とともに示した。年6回の研修を通して、具体的な場面を基にした課題の検討・分析を繰り返し、指導に反映させていく。

神経科学では、複雑な感情の形成や学習の深まりといった高度な脳の機能を、分子・細胞レベルで把握し、自己肯定感が得られる最適な条件を明らかにする。そうした学問の知見を研修でも活用して、生徒を前向きにするための働きかけについて、全教員が論理的に探究する場を設けようというねらいがある。

教育現場における神経科学の活用

には、国も関心を示しており、経済産業省主催の「未来の教室」研究会でも話題に取り上げられている。

指導力を高める環境整備

「最上位目標」を共有し、教員間の目線合わせを徹底

同校では、2014年度に指導改善に着手するとともに、教員の指導力を高めるために必要な環境を整えてきた。

最初に取り組んだのは、育てたい生徒像の共有だ。学校としての最上位目標を、「世の中ってまんざらでもない!」「結構大人って素敵だ!」というキャッチフレーズを用いて「社

会と大人を肯定的に捉えることができる生徒の育成」と設定し、校内の合意形成を図った。工藤勇一校長は、そのねらいを次のように語る。

「学校が一丸となるためには、校長の個人的な思い入れだけではなく、どの教員も納得して共感できる目標を設定する必要があります。本校の最上位目標についても、その意図や価値観を職員会議で丁寧に共有しました」（工藤校長）

その上で、教員が常に最上位目標に基づいて、日々の指導を行えるようになるために、あらゆる指導のあり方を皆で問い直している（図1）。

「手段が目的化し、何のために行うのかが分からなくなると、指導は形骸化してしまいます。生徒に何が必要なのか、その指導が生徒のためになっているのか、教員一人ひとりが常に意識し、生徒の姿に応じて方法を工夫することが重要です。主体的な生徒を育てるためには、まず教員自身が主体的に考え、行動できる必要があると考えています」（工藤校長）

指導の優先順位を意識することも、管理職が中心となって全教員に繰り返し働きかけたことの1つだ。例えば、以前の同校には、生徒を叱る際に、本当に伝えるべきことが生徒に伝

わっていないと思われる光景が見られた。一般的な服装や頭髪の指導と、重大な事故やケガにつながりかねない場合とを同じように厳しく叱っていたのだ。そこで、叱り方についての研修を実施。一般的な服装・頭髪の乱れを始め、「学校にお菓子を持ち込んで食べた」といった校則違反、「ペランダの柵にまたがって友だちと遊んでいる」といった危険な行動などの様々な場面を例示した。厳しく叱るべき順位を教員に考えさせてから、工藤校長が「命や身体にかかわることを最も強く叱るべきだ」という考えを伝えた。

「ここに挙げた例は、どれも叱ったほうがよいケースです。しかし、事の重大さによって叱り方に差をつけないと、生徒はお菓子を持ち込むことと、命にかかわる行動の危険度は同じだと捉えてしまうでしょう。不適切な言動を正すという目的を達成するための方法も、優先順位を意識して考えていく必要があります。この考え方は、あらゆる指導にあてはまると呼びかけました」（工藤校長）

工藤校長も、「最も重要なのは何か」「何を優先すべきなのか」を生徒に問いかける姿を、教員の前で意識的に示している。その1例が、校長室に

おける生徒同士の話し合いだ。同校では、生徒会や各学年の学級委員会といった活動の集会を校長室で行い、工藤校長やほかの教員も加わることが少なくない。工藤校長は見守りつつも、生徒が議論の目的を見失っていると感じれば、「重要なことから順位をつけて考えてみよう」といった助言をしているという。

「その言葉は、生徒だけでなく、そばで見守る先生へのメッセージでもあります。生徒にとって重要であれば、先生にとっても重要なのだということに気づいてほしいという思いもあります」（工藤校長）

教員の安心・安全の確保も、重視したことの1つだ。工藤校長は「最終的な責任は自分にある」と繰り返し教員に伝えるとともに、指導で悩んでいる教員がいれば、管理職が率先して相談に乗り、対応策を教員とともに考える。例えば、問題が起きて対応に悩んでいる時、保護者に電話をかけるか否か、かけるならどのような話をするのかといった手順を1つずつ示すこともあったという。

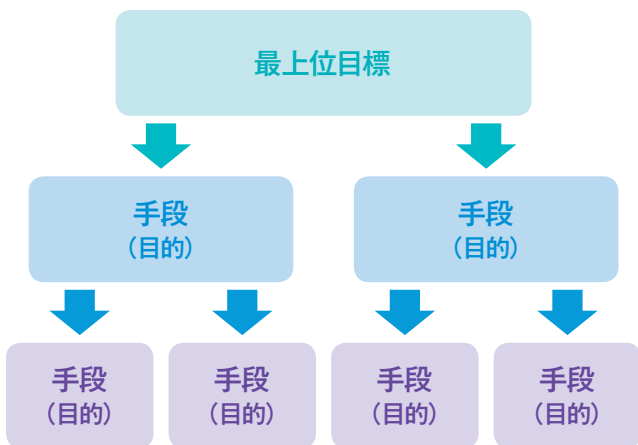
「先生方には、挑戦を続けてほしいと思っています。うまくいかないことがあったとしても、粘り強く取り組むことで、指導力が向上し、学校の取り組みも充実していきます。そうした意欲が持てるよう、先生方が失敗を恐れずに取り組むことができる環境を整えようと考えました」（工藤校長）

教員の意識改革の推進

社会とかかわる生徒を見て、教員に課題の自覚を促す

同校では、生徒が社会で求められるスキルを身につけることを重視し、実社会と連動させた取り組みを全学年で推進している（P.20図2）。例を挙げると、2年次には、企業の人

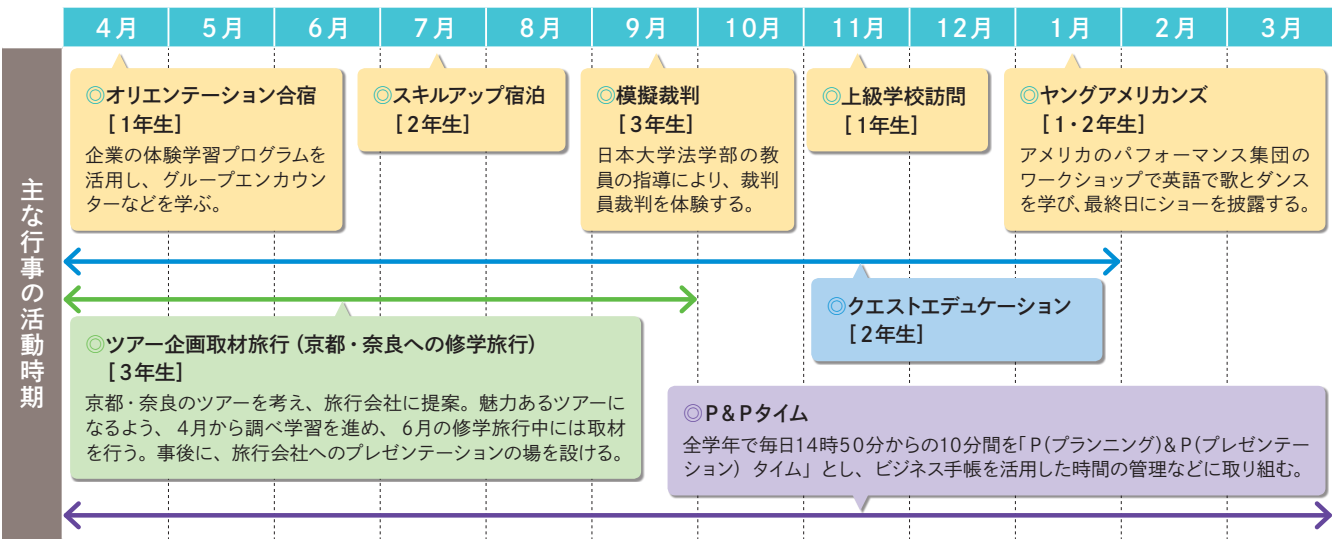
図1 常に「目的」を意識した指導実践の概念図



同校が指導で最も重視するのは、「目的」に照らし合わせて「手段」を考えることだ。そこで、まずは「どのような生徒を育てるべきか」という「最上位目標」についての教員間の目線合わせに力を入れ、その実現に向けて個々の教員が優先すべき手段を考えてほしいと呼びかけた。「手段」が「目的」とならないよう注意を促すとともに、教員の自由なアイデアを歓迎している。

* 麹町中学校提供資料を基に編集部で作成。

図2 社会に開かれた問題解決型カリキュラムの例



* 麹町中学校提供資料を基に編集部で作成。

材育成部門の担当者らを講師として招き、ブレインストーミングやKJ法などを学ぶ「スキルアップ宿泊」を行う。同校の課外活動に協力する大学生のファシリテートの下、生徒はクラスメートと話し合う中で、進んで自分の考えを述べるようになり、さらに、多様な考えを整理できるようになるという。

同じく2年次の「クエストエデュケーション」では、テレビ局や建築メーカーといった様々な企業から出される「世界を変える新商品や新サービスを開発する」などの課題と向き合い、グループごとにアイデアを練って提案する。答えが1つではない問いに対して、どのグループも、スキ



写真1 社会に開かれた問題解決型カリキュラムは、教員が社会で求められるスキルについて理解を深め、それを育成する指導ができていくかを振り返る機会でもある。そこでは、教員が「生徒とともに学ぶ」ことを重視している。

ルアップ宿泊で学んだスキルを積極的に活用しながら、生き生きと話し合っているという。

こうした一連の問題解決型カリキュラムは、教員自身のOJTの役割も担っている。生徒からの相談にすぐに応じられるよう、教員は常に生徒に寄り添うが(写真1)、実社会とかがわって変化していく生徒の姿を見守る中で、教員にも自身の指導を振り返り、改善するヒントをつかんでほしいというねらいがある。例えば、「スキルアップ宿泊」におけるブレインストーミングやKJ法の活用は、話し合いの場をどのように形成し、多様な考えを引き出せばよいのか、生徒を前向きにするためには何が必要なのか、教員が考えを深めるきっかけになると、工藤校長は話す。

「先生方には、これからの社会を生きる生徒を前に、自分の指導には足りない部分があること、そしてそれが何かを知ろうとすることから始めてほしいと思います。課題を自覚すれば、より明確な目的意識を持って指導改善に取り組めるようになるでしょう。生徒とともにいることで、社会で必要とされるスキルとは何か、

どのように活用したらよいかを先生自身も実感し、自分の問題として意識できるようになると考えています」

生徒の学力向上に向けて

生徒の学習意欲を喚起する指導を目指し、宿題を廃止

2018年度には、教員の指導力の育成につながる新たな3つの挑戦を始めた。

1つめは、学力向上の取り組みだ。まず、全教科で定期考査をなくし、単元ごとの単元テストと年5回の実力テストで評価することにした。「なぜ、定期考査が必要なのか」「ほかに方法はないのか」などと、全教員が約半年間にわたって検討し、結論に至ったものだ。単元テストは、学習内容の定着度をこまめに測るものと位置づけ、実力テストは、生徒自身が自らの定着度を総合的に把握できるものにしたと考えている。もちろん、教員の作問力を伸ばすねらいもある。

単元テストでは、希望者を対象に再テストを行い、評価に反映させる。例えば、本試験で70点、追試で80



写真2 神経科学研修の第1回には、東京都や神奈川県私立中学校の教員らも参加。まず、教員一人ひとりが指導における課題を挙げていった。そして、それに応じたグループに分かれ、KJ法などを用いて課題を分類し、解決策を話し合った。



点だった生徒の評価は、本試験のみで80点だった生徒と同じにする。当初は、そうした評価方法に反対する教員もいたが、議論の中で、「取り組みの目的はあくまでも生徒全員の学力向上であり、合格点に達した期間の長さにかかわらず、最終的な成績で絶対評価すべきだ」という意見に集約されていった。

そうしたやり取りを繰り返す中で、従来のやり方にとらわれず、目的を達成するために自分は何をすべきなのか、常に教員一人ひとりが考える習慣を身につけていった。

さらに、生徒の自主的な学習意欲を引き出そうと、宿題を廃止した。

「宿題を出せば家庭学習時間は増えると思いますが、目的意識がないまま取り組んでも、真の学力向上にはつながりません。それよりも、各教科の授業で生徒の知的好奇心を刺激し、自ら学習に向かう意欲を高められるよう、教員の問いかけや生徒の学び合いなどを充実させていきたいと考えています」(工藤校長)

生徒とのかかわりの深化に向けて

若手がベテランから学ぶ場を全員担任制で増やす

2つめは、固定担任制から、学年

団の全教員が担任となる「全員担任制」への移行だ。生徒一人ひとりを、得意な分野や職歴が異なる複数の教員が目で見守り、ふさわしい形でかわられるようにしたいと考えた。

教員間の連携を強化することで、若手教員がベテラン教員から、生徒へのかかわり方を学ぶ場を増やし、指導力の向上につなげようという意図もある。また、チームで指導にあたれば、教員一人ひとりの失敗への不安も軽減され、意欲的な指導改善にも結びつくと考えた。

「教科指導に長けた先生もいれば、生徒をやる気にさせるのが上手な先生もいます。各教員がチームで担任をすれば、それぞれの長所を今まで以上に発揮できるようになるでしょう。生徒への働きかけをさらに充実させていけると思います」(工藤校長)

3つめは、前述した神経科学の知見に基づく研修だ(写真2)。生徒のモチベーションについて科学的な理解を深めていく中で、教員が経験則を理論化・言語化できるようになれば、経験の少ない教員にも指導のノウハウが共有され、学校全体の指導力の向上につながる。

今後は、モチベーションが変化する仕組みを体系化するため、他校や研究機関などとの連携や、ビッグデー

の活用も検討中だ。

「実社会では、自ら学びを深めることがますます重視されます。教員も、教科の内容を効率よく教える技術ではなく、生徒同士が意欲的に学び合える環境を設定し支える、ファシリテーターとしての技術を磨いていく必要があるでしょう。社会で役立つ学びを実現させるために、神経科学の実証的なデータに基づきながら研修を続けていきたいと考えています」(工藤校長)

成果・展望

時代や社会を牽引し続ける教員集団を目指したい

指導改善を始めてからの4年間で、「目的」に応じて「手段」を考えようという方針は同校の文化として根づきつつある。実際、生徒の課題を見据えた改善のアイデアを率先して出す教員も増えた。それらは、様々な取り組みとして結実している。

今後も、さらなる指導改善を目指し、全校を挙げて取り組んでいく考えだ。工藤校長は、同校の今後の展望を次のように語る。

「教員一人ひとりが目的意識を持って動けるようになってきているため、教員の異動があっても、指導改善を継続できる体制が着実に構築されてきていると感じます。未来を担うのは生徒であり、そうした生徒と日々向き合う存在である教員には、重要な使命と責任があります。本校の目指す生徒像は、目指す教員像そのもの。今後は社会への視野を広げ、新たな情報を積極的に収集し、教育活動への応用法を探っていくことが必要になります。時代や社会の求めに応じるだけでなく、それらを牽引していけるよう、学び続けることができる教員を育てていきたいと考えています」